

Human Spacing Behavior に関する研究

— Communication 事態における物理的 距離の機能を中心として —

伊 藤 典 幸

問題

Human Spacing Behavior に関する研究は、1960年代初頭より数多く行なわれる様になり、これまでに様々な観点より多くのデータが蓄積されて来た。本研究では Personal Space, あるいは、対人距離(interpersonal distance) という言葉でこれまで取り扱われてきている人間が他の人間との間に維持しようとする物理的空間について検討を加える。

対人距離については、これまで多くの研究がなされて来ており、様々な知見が発表されている。しかし、それらの多くは、単に現象の記述に留まっておりそれらを総合的に説明しうる理論は構築されていない。これまで行なわれて来た研究は、大きく2つに分類することが出来る。すなわち、対人距離が、その situation によって変化するということをうけて、その大きさを決定する要因についての研究、そして、それぞれの situation において最適とされる対人距離が侵された場合の反応についての研究である。

前者においては、相手との知り合いの程度、性の組み合わせ、地位等様々な、対人距離を変化させる要因が明らかにされてきた。しかし、なぜそうなるのか(たとえば、初対面の人に対しては友人に対するよりなぜ大きな対人距離をとるのか?といった)という問に対し、これらすべての規定要因にわたり総合的に回答を与えるような概念は提出されていない。

後者については、それぞれの situation における最適な対人距離が侵された場合の様々な反応が明らかにされて来た。そして、それに関連して、対人距離と eye-gazing, smile といった他の身体反応との間に、そこで行なわれる interaction の intimacy を一定に保つ方向への相補的な関係が見られることが明らかにされた。この知見は、前者において得られた対人距離の大きさの規定要因を総合的に説明する概念として「interaction の intimacy」を用い得る可能性を示唆するものといえる。

しかし、対人距離と「interaction の intimacy」との関係(すなわち、intimacy が高い interaction を期待するとき、対人距離が小さくなるというよう

な)についての研究は、これまであまりされていない。また、対人距離と他の身体反応(interaction の intimacy を変化をさせるような)との相補的な関係についてもこれまで十分に検討されているとはいえない。本研究は、このことをふまえ、対人距離が、そこで期待される「interaction の intimacy」によって決定されることを証明するとともに、対人距離と、他の身体反応との相補的な関係についてそれが、相手との関係、その距離が決定されるプロセスにかかわらず見られるものであるかを調べることを目的として行なった。

実験 I

目的 対人距離と他の身体反応の相補的な関係についての検討を行うと共に、対人距離と「interaction の intimacy」の関係について調べる。

方法 質問紙を用いたシュミレーション実験の手法を用い、大学生131名について行なった。

対人距離と他の身体反応との間の相補的な関係については、相手との関係に関して

- (i) (相手と友人の場合
相手と初対面の場合

の2条件を、また、相手との間の距離がいかに決定されたかに関して、

- (ii) (外的制約によって決定された場合
相手によって決定された場合

の2条件を設定した。さらに、相手との間の対人距離について、相手との間の距離が

- (iii) (近すぎる場合
適切な場合
遠すぎる場合

の3条件を設定し、それぞれの条件における

- (1) eye-gazing
- (2) 顔を相手のほうへ向けておく
- (3) smile
- (4) 相手から顔をそらす
- (5) 手を髪や顔にもっていく

の反応の頻度を測定した。

実験は、(i)(ii)(iii)の条件を組み合わせた状

況説明文と、2人の人間が向い合って話をしている図(1人を被験者、1人を相手と想定、2者間の距離は、(iii)の条件によって変化させてある)を示し、その状況で、(1)~(5)の反応を自分がどのくらいすると思うかを5件法(たえずする~全くしない)で答えるという形の質問紙を用いて行った。

「interactionのintimacy」と対人距離の関係については、相手との間に行なわれるinteractionにおいて期待されるintimacyの大きさが異なる5つの状況設定において相手とどのような位置関係をとるかを調べた。これは、テーブルの周囲にイスがいくつかおいてある図(相手がそこに座っている)を示し、それぞれの状況設定において、被験者がどのイスを選択するかを問う形の質問紙を用いて行った。

結果 距離と他の身体的反応との相補的關係は、eye-gazing、及び、顔を相手のほうに向けておくの2つの反応にのみ部分的に確認された。eye-gazingについては相手と友人の場合には、相手が適切な距離より離れているときにのみ、逆に、相手が初対面のときには、相手が近づきすぎているときにのみ相補的關係が見られた。相手に顔を向けておくについては、相手が離れすぎているときにのみ相補關係が見られた。相手との間の距離が決定されたプロセス、条件(ii)については、差が見られなかった。

「interactionのintimacy」と対人距離の関係については、相手との間に行われようとしているinteractionにおいて高いintimacyを期待する程、相手との間にとられる対人距離が小さくなるという結果が得られた。

実験II

目的 実験Iで得られた距離と他の身体反応との間の相補的關係に関する知見を、実際の会話場面で確認することを目的に行った。

方法 大学生60名について、実験室実験を行った。相手との関係に関し

- (i) (友人
初対面)

の2条件を設定した。また、相手との距離に関し、各被験者が適切とする距離をもとに、相手との距離が、

- (ii) (近すぎる
適切
遠すぎる)

の3条件を設定した。そして、それぞれの条件について、

- (1) eye-gazing
- (2) smile
- (3) 顔をそらす

の反応の総時間を測定した。実験は、(ii)の条件に従い実験者が設置したイスに座り、(i)の条件に従い選定した実験協力者と15分間話し合いをするよう被験者に依頼し、その間の被験者の行動をVTRに録画、分析するという方法をとった。

結果 実験Iで得られた対人距離と身体反応の相補的關係は、eye-gazing、smile、顔をそむけるのいずれにおいてもみられなかった。

考察

ここで得られた結果は、対人距離は、相手との間に行なわれる、あるいは、行うことを期待するinteractionのintimacyによって決定されることを示す。また、実験室実験においては確認されなかったが、eye-gazing等、interactionのintimacyを増減する身体反応と、相手との距離の間に相補的關係がみられるという結果は、他の人間との間にとる距離が、その相手との間に行なわれるinteractionのintimacyを増減する機能を持つことを示唆するものである。

このことは、これまでの研究で明らかにされて来た様々な規定要因を、友人に対する場合は、初対面の人に対する時よりもより高いintimacyを持つinteractionを求める。従って、友人に対する場合は、初対面の人に対する場合より小さな対人距離がとられるという形で、総合的に説明する概念としてここで取り扱った「interactionのintimacy」を用いる可能性を示唆するものであると考えられる。しかしながら、この点に関しては、さらに研究を進める必要がある。